

[講演]

現代スラヴ学におけるスラヴ・マイクロ言語文化

アレクサンドル・ドゥリチェンコ

ルスキ・ケレストゥル出身のユーゴスラヴィアのルシン人
ウラジミル・マラツコ (1931-1972) に捧ぐ

1. ミクロ言語文化研究前史について

日本におけるスラヴ・マイクロ言語学とマイクロ言語文化研究の発展は、2003年にリュブリャナで開催された第13回国際スラヴィスト会議にて、私が拙著『スラヴ・マイクロ文章語：その形成と発達の諸問題』（1981）を野町素己氏に進呈した時に端を発する。野町氏は日本における総合的なマイクロ文章語の共同研究を展開し、氏自身はポーランドのカシュブ語、ルーマニアおよびセルビアのバナト・ブルガリア語、アルバニア、マケドニア、セルビア（コソヴォ）に跨るゴラ方言研究、西ボレシエ語、ラフ語など複数の領域で成果を上げている。また、三谷恵子氏によるユーゴスラヴィアのルシン語やブルゲンラント・クロアチア語研究、木村護郎クリストフ氏のソルブ語研究も国内外で知られ、ヨーロッパから遠く離れた日本でも、マイクロ言語学はスラヴ語研究の重要な領域として発展しているようである。これは世界レベルでの当該分野の発展とも連動しているのだろう。周知のとおり、2008年に開催された第14回国際スラヴィスト会議では、筆者の提案により「マイクロ文章語研究部会」が成立するに至っている。

さて、スラヴ・マイクロ言語文化研究の概念は、1960年代半ばから発展しはじめた。初期段階での関心は、当時実質的にほぼ何も知られていなかった南ルシン語（あるいは、ルシン語、ユーゴスラヴィアのルシン語）に向けられたものであった。少なくとも、「大スラヴ言語文化研究」の枠組みでは、その当時、このマイクロ言語に関する文献は何もなかった。その例外となったのは、地元の定期刊行物に出版され、局地的にしか普及していない刊行物に掲載された僅かな記事のみであった。

おそらく、これら全てのことがどのように始まったかについて、簡単に思い起こしてみることには意味はあるだろう。

私がアシガバード（トルクメン・ソヴィエト社会主義共和国）でまだ大学生だった

頃、学術的関心がスラヴ学に定まるまでの間、私はスラヴ語もスラヴ語以外の言語も多く学んだ。そのころ、アシガバードの共和国図書館と学士院図書館は、ソ連で出版されたロシア語の必須文献を全て所蔵していた。それに比べると、大学図書館は蔵書のレベルがやや低かった。私がとりわけ関心を抱いたのは、当時のユーゴスラヴィアの諸言語であった。ある時、ザグレブの青年誌『プラヴィ・ヴィエスニク *Plavi vjesnik*』に、私が同国の若者とセルビア・クロアチア語でも文通したいと書いて投稿した募集広告が掲載されたことがある（1965年8月5日567号）。それに応じてくれた多数の手紙のなかに、1965年8月9日付けのセルビアのヴォイヴォディナから送られてきた手紙もあった。それはルスキ・ケレストゥル（Руски Керестур）出身のウラジミル・マラツコからの手紙であり、その手紙に彼は次のように書いていた：

私はルシン人です。つまりユーゴスラヴィアのルシン人です。あなたに言えるのは、私たちの言語はとても興味深いものだということです。まずは、私たちがウクライナのカルパチアからユーゴスラヴィアに移住してきてから1947年で200年になるということが言えます。私たちは、スポティツァとノヴィ・サドの間の中部バチカに住んでいます。また、私たちの言語はウクライナ語の要素を多くを保持ってきたということも言えます。

こうして文通が始まった。私はウラジミルの母語である言語に強く惹きつけられた。11月頃に、彼は当時ルスキ・ケレストゥル村（ユーゴスラヴィアのルシン人の中心地）で発行されていた『ルスケ・スロヴォ *Руске слово*』という新聞を送ってくれた。それは今も私のアーカイブに保存されている（発行年度21, 第39号、1965年9月24日付け、8ページ）。1967年の8月まで、彼は私にセルビア・クロアチア語で手紙を書いてきていたが、その後、私の頼みを聞きいれ、母語の南ルシン語で書いてくれるようになった。彼は1965年末にサヴィノ・セロに引っ越し、そこでモンテネグロ人のダナと結婚してからも、私に手紙を書いたり、戦後最初の学校文法書であるミコラ・コチシの『マツェリンスカ・ベシエダ *Маџеринска бешџџа*』（1965）を含む、南ルシン語の本を送ってくれたりした。私たちの文通は、彼の早すぎる死まで続いた。彼は僅か41歳で亡くなったのである。原因は軍隊での過剰な放射線被ばくのことである。1990年に私はサヴィノ・セロに行き、そこでダナ夫人と会った。ウラジミルはスキ・ケレストゥルに埋葬された。私はルスキ・ケレストゥルに行ったのだが、別の予定が詰まっていたため、墓参はかなわなかった。私のアーカイブには、彼からの30通の手紙と、現在はノヴィ・サドに編集部があり、既に半世紀近く私に送り続けてくれている『ルスケ・スロヴォ』紙や、贈り物の多くの本が保存されている。

2. 学士院会員ニキータ・イリイチ・トルストイとの出会いと南ルシン・ミクロ語研究

ウラジミルと連絡を取るようになってすぐに、私は南ルシン語についての資料を地元の図書館で探し始めた。残念ながら、ソ連時代このミクロ言語について何も知られていなかった。西ウクライナのルシン語についてさえ何も書かれていなかった。ウクライナ文章語史は、実質的に当該地域に言及していなかった。そのころ、私は当時ユーゴスラヴィア諸言語の最大の専門家で、後にソ連学士院/ロシア学士院会員となるニキータ・イリイチ・トルストイに連絡を取った。1965年末、私は彼に手紙を書き、ソ連ではこの問題は研究されているのか、南ルシン語は独立したスラヴ語と考えられるのか、この言語に関する学術的な研究は存在するのか、ユーゴスラヴィアに移住した時、彼らは何語で話していたのかななどを尋ねた。返事が来ることは期待していなかった。しかし予想外に3ヵ月後の1966年3月30日にトルストイからの返事が届き、そこには、次のように書かれていた。

ルシン語は、独立したスラヴ文章語（ミクロ語）です。もしルシン語が標準化されず、その言語による出版（教科書、書籍、詩集、新聞雑誌）が行われていないのであれば、ルシン語は、例えばソ連のブルガリア語や（ベラルーシ領内の）ポーランド語の方言がそうであるような、スラヴ語の方言の一つ、単なる移住者の一方言のままだったでしょう。確かにルシン文章語の基盤は方言ですが、これはもはや単なる方言とは言えません。というのは、それは文章語のために練り上げられ、独自の規範文法を持っているからです… ルスキ・ケレストゥルのルシン方言は（起源的としては）ウクライナ西部方言です。おそらく、それとスロヴァキア東部方言でもあるでしょう（ですから、あなたはスロヴァキア語も勉強しなくてはなりません！）。あるいは、スロヴァキア東部方言とウクライナ西部方言の混成方言とも言えるかもしれません（今日ではさらにセルビア語との混交も起きています）。とても興味深い事例です。エウゲン・パウリニは自著『スロヴァキア文章語史』で、それをスロヴァキア語とみなしていますが、他の研究者はウクライナ語と考えています。彼らが「ロシア人 *русские*」と自称しているのは、彼らがカトリック教徒ではなく、東方典礼カトリック教徒であったためです。

私は、アルマ・アタで開催予定の中央アジア諸国やカザフスタンの大学生研究集会で発表する予定の南ルシン語とセルビア・クロアチア語の言語接触に関する報告要旨を持ってモスクワに行き、トルストイ氏と会った。しかし、その報告要旨を見せる決心はつかなかった。ただ、私はアルマ・アタからアシガバードに戻ると、表した報告の要旨をすぐに郵便で発送し、そしてほどなくしてトルストイ氏から返事を得た（1966年6月20日付け）。その返事には次のように書いてあった。

あなたから手紙と本（ミコラ・コチシが1965年に出版した学校教科書『マツェリンスカ・ベシエダ』の第一部）を受け取り大変喜びました。文法は興味深いものです。そして、あなたの報告、より正確に言うと、あなたの報告要旨は全く以て正確に書かれていますし、このテーマの研究を続けていく意味があります。あなたのテーマについて少し考えてみたのですが、このテーマは、真剣に熟慮して取り組めば、学位論文にもなりうるであろうという結論に至りました。「ルシン語」（とりあえずこのように呼びましょう）がスラヴ文章語（標準語）の一つとして見做しうることについて、そして非常に小さな領域に分布し使用者が大変少ないということが、本質的に事態を変えないということについて、あなたは全く正しいです。

そしてさらに次のように書いてある。

私は、私たちが知り合えたことを嬉しく思いますし、あなたが、たとえスラヴ学の中心地から離れていても、スラヴ学者になれると期待しています。覚えておいてください。あらゆることは努力で得られるますが、結局それこそが人生で最も面白いことなのです。運命があなたをどこに導きこうとも、常に努力してください。

このようにして全てが始まった。私は学位論文のための資料を集め始めたが、南ルシン語に関する初期の研究を発表したのは、サマルカンド大学で働いていた1969年のことだった。南ルシンの人々と良好な関係を構築した私は、1972年に彼らの雑誌『Шветлосць』に、私の最初の論文「若いスラヴ文章語の正書法の規範形成について」を南ルシン語で刊行した。1974年、ソ連科学アカデミーのスラヴ学（及びバルカン学）研究所にて、トルストイ氏の指導の下、私は博士候補位論文「ユーゴスラヴィアのルシン文章語（音声・形態論概要）」の公開審査に合格した。1976年には、中央アジアを去りエストニアに移り、タルトゥ大学に職を得た。そこで南ルシン語や、その他のスラヴ学の諸問題、スラヴ・マイクロ言語文化研究、そして一般言語学の研究を続けた。

3. 南ルシン語以外のマイクロ文章語研究

1970年代の初め、南ルシン語以外に、私はスラヴ世界の他地域のマイクロ言語を研究するようになり、南ルシン・マイクロ語がスラヴ世界で唯一の例ではないことがわかってきた。マイクロ・スラヴ世界が徐々に明らかになってきたのである。1976年からブルゲンラント・クロアチア語やその他のマイクロ文章語についての研究発表をし始めた。マイクロ言語の数が増え、加と関連したこれらの研究の結果は、博士論文「スラヴ・マイクロ文章語（形成と発展の諸問題）」として実を結び、1981年、ミンスクのベ

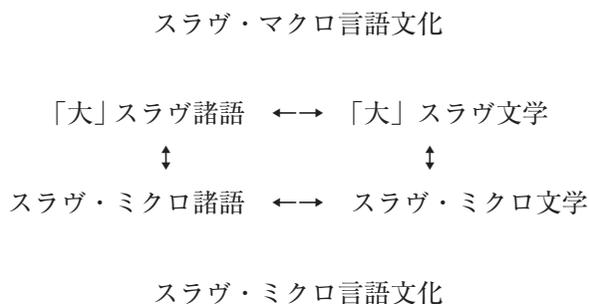
ラーシ科学アカデミー付属ヤクブ・コラス名称言語学研究所における公開審査を経て学位を取得した。

博士論文では、南ルシン語に加え、ブルゲンラント・クロアチア語、モリーゼ・スラヴ語、クロアチア語チャ方言に基づく文章語、クロアチア語カイ方言に基づく文章語、プレクムリエ・スロヴェニア語、バナト・ブルガリア語、カシュブ語、東スロヴァキア語、ラフ語、カルパート・ルシン語、レジア語の類型論的な分析を行った。

論文の理論部分は、拙著『スラヴ・マイクロ文章語（形成と発展の諸問題）』（1981）に反映されている。その後のスラヴ・マイクロ言語研究では、マイクロ言語がさらに増えていった。ソルブ語（上ソルブ語と下ソルブ語）、エーゲ・マケドニア語、ポマク語、ヴェネツィア・スロヴェニア語、西ポレシエ語、ブニェヴァツ語、シレジア語、グラル語などである。私はさらにマイクロ諸言語で書かれたテキスト例の二巻本『スラヴ・マイクロ文章語：テキスト集』（2003-2004）を刊行した。また、『スラヴ言語文化研究の基礎』（2011）の第二巻には、スラヴ・マイクロ言語学を特別に扱った章を含めた。

4. スラヴ・マイクロ言語学とマイクロ言語文化

以上で述べたように、スラヴ・マクロ言語学の特殊部門である「スラヴ・マイクロ言語学」が徐々に形成されてきた。なお、スラヴ・マイクロ言語学はスラヴ・マイクロ言語文化研究の一部門である。マクロ言語文化とマイクロ言語文化の図式的な相関関係は、次のようになるだろう：



なお、↓という記号は条件付きであることを考慮する必要がある。ある場合には「大」スラヴ諸語や「大」スラヴ文学との系統的な関係を表すが（例えば、ブルゲンラント・クロアチア語、モリーゼ・スラヴ語、カイ方言に基づくマイクロ文章語、チャ方言に基づくマイクロ文章語は、クロアチア・セルビア語／クロアチア語と関係がある）、別の場合には直接的な関係が見出されない（例えば、上・下ソルブ・マイクロ言語の場合）。

しかし、全てのスラヴ・マイクロ諸言語がスラヴ・マイクロ言語文化を形成していると

いうわけではない。それらのいくつかの言語は、第二の領域、すなわちスラヴ・マイクロ文学がまだ萌芽状態にすぎなかったり、また他の場合には、言語的側面が特に問題となるなどである。とはいえ、この過程の両側面をうまく発展させているマイクロ言語もあり、それこそが真のマイクロ言語文化といえるのである。

5. スラヴ・マイクロ文章語および言語造成プロジェクトの分類

スラヴ・マイクロ言語文化研究を論じる前に、これまでに私が挙げたスラヴ・マイクロ語を全て示す必要がある。その際、ここで提示する分類は民族・言語・系統的及び文章語の分類原則と地域・地理的分類原則とに基づいているということを考慮に入れる必要がある。それを踏まえると、マイクロ文章語は「自立的」、「言語島の」、「周辺・言語島の」、「周辺の（あるいは地域的）」の四種に分類することができる。

表 1

マイクロ文章語	国、地域 / 文化的中心地	統計データ
I. 自立的マイクロ文章語		
上ソルブ語 (hornjoserbšćina)	ドイツ、ザクセン州、上ラウジッツ 中心地：ブディシン(バウツェン)	4万人
下ソルブ語 (dolnoserbšćina)	ドイツ、ブランデンブルク州、下ラウジッツ 中心地：フシェブス(コト布斯)	約2万人
カシュブ語 (kaszëbsczi jãzëk)	ポーランド、グダニスク県、ポモージェ県、西ポモージェ県の東部 中心地：カルトゥズィ、グダニスク	20万～ 36万7千人
II. 言語島のマイクロ文章語		
ユーゴスラヴィア・ルシン語／ 南ルシン語 (руски язык)	セルビア(ヴォイヴォディナ自治州)、クロアチア 中心地：ルスキ・ケレストゥル、ノヴィ・サド	約2万5千人
ブルゲンラント・クロアチア語 (gradišćanskohrvatski jezik)	オーストリア、ブルゲンラント 中心地：アイゼンシュタット(ジェレズノ)	3万5千～ 4万5千人
モリーゼ・スラヴ語 (po/na našu)	イタリア、モリーゼ州、カンポバッソ県 中心地：-	約4千～ 4千500人(?)
レジア語 (rozajanski jazel/langač)	イタリア、ヴェネツィア・ジェリア州、レジア渓谷 中心地：-	約3千人(?)
バナト・ブルガリア語 (banátsći balgarsći jazic)	ルーマニア、セルビア(バナト地方) 19世紀の中心地：ヴィンガ	1万8千～ 2万2千人
III. 周辺・言語島のマイクロ文章語		
カルバート・ルシン語 (русинський язык)	ウクライナ(ザカルパッチャ州)、東スロヴァキア、ポーランド、ハンガリー、ルーマニア、アメリカ合衆国、カナダ 中心地：各地によって異なる	データに 食い違いあり
エーゲ・マケドニア語 (македонски език от Egej)	ギリシャ(エーゲ・マケドニア) 中心地：-	11万から 16万人

ポマク語 (pomatskes giezik)	ギリシャ(クサンティ県、ロドピ県、エヴロス県) 西トラキア 中心地：コモティニ (?)	3万6千人～ 3万9千人
ヴェネツィア・スロヴェニア語 (beneškosl(i)enski jezik)	イタリア(フリウリ地方—リイスカ・クライナ、 トーレ溪谷、ナティゾーネ溪谷) 中心地：—	約9千人
ブニェヴァツ語 (буневачки језик/bunjevački jezik)	セルビア(ヴォイヴォディナ)、ハンガリーの国境 地帯 中心地：スポティツァ	2万人 (?)
IV. 周辺の(地域的) ミクロ文章語		
チャ方言文章語 (čakavština)	クロアチア(アドリア海沿岸と島々) 中心地：スプリット、リエカ (?)	—
カイ語方言文章語 (kajkavština)	クロアチア(北西・中部) 中心地：ザグレブ、ヴァラジディン (?)	—
プレクムリエ・スロヴェニア語 (prekmurščina)	スロヴェニア(プレクムリエ地方) 中心地：ムルスカ・ソボタ	—
ラフ語 (laščina)	チェコ(シレジア地方) 中心地：フリーデク＝ミーステク	—
東スロヴァキア語 (vichod(no)slovenska reč)	東スロヴァキア 中心地：—	—
西ボレシエ語 (заходьшнопольська мова)	ベラルーシおよびウクライナの一部 中心地：ミンスク (?)	—
シレジア語 (ślōnska godka)	上シレジア(ポーランド)およびチェコ領シレジアの 東部(オストラヴァとチェスキー・チェシーンの間) 中心地：カトヴィツェ	—

見てわかる通り、この表には20のミクロ文章語が挙げられ、ミクロ諸語の自称、言語の分布、文化的中心地の有無、話者数(データがある場合)が示されている。拙著『スラヴ言語文化研究の基礎』で述べた18のミクロ言語に加え、今日ではセルビアとハンガリーの隣接地域のブニェヴァツ語、ポーランドとチェコのシレジア語の2言語を付け加えた(拙著でもこれらのミクロ言語の試みについて述べているが、分類枠組みにはまだ組み込んでいない。詳しくはpp.345-346を参照)。ポーランドのグラル・ミクロ文章語形成の試みの状況は依然不明である。なお、ここでは述べていないが、スラヴ世界のいくつかの地域でもさらに別のミクロ文章語の形成が試みられている。

6. スラヴ・ミクロ文章語の言語系統的側面

これらのミクロ文章語の純粋に言語系統的な基盤について述べると、それらの大半は南スラヴ語群に含まれ、それに続いて西スラヴ語群、そして東スラヴ語群の順となっていて、そして最後に論争の対象になる南ルシン語が幾分独立的な位置を占めていることがわかる。ミクロ語の言語系統的な分類を、それらの地域・地理的な分類による地位とあわせて以下に提示する。

表 2

言語群と諸言語		マイクロ文章語		地域・地理的分類上の地位
I. 南スラヴ語群				
クロアチア語	→	チャ方言文章語	←	周辺の
	→	カイ方言文章語		
	→	ブルゲンラント・クロアチア語	←	言語島の
	→	モリーゼ・スラヴ語		
スロヴェニア語	→	プレクムリエ・スロヴェニア語	←	周辺の
	→	ヴェネツィア・スロヴェニア語	←	周辺・言語島の
	→	レジア語	←	言語島の
ブルガリア語	→	バナト・ブルガリア語	←	言語島の
	→	ポマク語（ギリシャ）	←	周辺・言語島の
マケドニア語	→	エーゲ・マケドニア語	←	周辺・言語島の
セルビア・クロアチア語	→	ブニェヴァツ語	←	周辺・言語島の
II. 西スラヴ語群				
ソルブ語	→	上ソルブ語	←	自立的
	→	下ソルブ語		
カシュブ語	→	カシュブ語	←	自立的
チェコ語 （およびポーランド語）	→	ラフ語	←	周辺の
スロヴァキア語	→	東スロヴァキア語	←	周辺の
シレジア語	→	ポーランド語	←	周辺の
III. 東スラヴ語群				
ウクライナ語	→	（カルパート）ルシン語	←	周辺・言語島の
ベラルーシ語および ウクライナ語	→	西ポレシエ語	←	周辺の
IV. ザカルパッチャ・ウクライナ語（東スロヴァキア語への過渡的言語）				
		南ルシン語	←	言語島の

注：1) ソルブ語の言語系統に関する統一した見解はない。ある研究者らはソルブ語は同一の言語系統的な起源を持つと考えるが、別の研究者たちはそのようなものはないと考えている（それゆえ、上ソルブ語と下ソルブ語）。

2) ラフ語は概して発生的にチェコ語に近いが、より正確に言えば、チェコ語・ポーランド語の過渡方言群と関係している。

3) 西ポレシエ語は、ベラルーシ語およびウクライナ語の特徴を有す。

4) ブニェヴァツ語は、セルビア・クロアチア語起源である。

5) シレジア語は、ポーランド語・チェコ語起源である。

したがって、起源的に南スラヴ語群に属する 11 のマイクロ言語、西スラヴ語群に属する 6 言語、東スラヴ語群に属する 2 言語、そして 1 つの過渡的言語がある。

7. ミクロ言語からミクロ言語文化へ

次に取り上げる問題は、ミクロ言語のうちどの言語がスラヴ・ミクロ言語文化に組み込まれるのか、どの言語がその過程にあるのか、そしてどの言語がミクロ言語文化のもう一つの側面であるスラヴ・ミクロ文学を発達させることなく、一面的に機能しているのかである。

表 3

ミクロ言語	国	ステータス
I. 自立的ミクロ言語		
上ソルブ語	ドイツ	十分に発達
下ソルブ語	ドイツ	十分に発達
カシュブ語	ポーランド	十分に発達
II. 言語島のミクロ言語		
南ルシン語	セルビア、クロアチア	十分に発達
ブルゲンラント・クロアチア語	オーストリア	十分に発達
モリーゼ・スラヴ語	イタリア	あまり発達していない
レジア語	イタリア	一定程度発達
バナト・ブルガリア語	ルーマニア、セルビア	十分に発達
III. 周辺・言語島のミクロ言語		
カルパート・ルシン語	ウクライナ、スロヴァキア、ポーランド、ハンガリー、(ルーマニア)、アメリカ、カナダ	十分に発達
エーゲ・マケドニア語	ギリシャ	あまり発達していない
ボマク語	ギリシャ	あまり発達していない
ヴェネツィア・スロヴェニア語	イタリア	あまり発達していない
ブニェヴァツ語	セルビア、ハンガリー国境地帯	一定程度発達
IV. 周辺の(地域的)ミクロ言語		
チャ方言文章語	クロアチア	一定程度発達
カイ方言文章語	クロアチア	一定程度発達
プレクムリエ・スロヴェニア語	スロヴェニア	あまり発達していない
ラフ語	チェコ	あまり発達していない
東スロヴァキア語	スロヴァキア	あまり発達していない
西ポレシエ語	ベラルーシ(ウクライナの一部)	一定程度発達
シレジア語	ポーランド、チェコ	十分に発達

この表3に反映されたデータによれば、ミクロ言語の半分がちょうど「大」スラヴ文章語と同じ方向に向かっているといえるのは明白である。つまり、これはミクロ言語

とマイクロ文学という2つの側面を持っているのである。このような状況にあるのは、上ソルブ語、下ソルブ語、カシュブ語、南ルシン語、ブルゲンラント・クロアチア語、バナト・ブルガリア語、カルパート・ルシン語、シレジア語の8言語である。

さらに、これらに使用領域の程度に差がある5つのマイクロ言語を加えることができる。レジア語とブニェヴァツ語は、徐々に二つの側面を同程度に満たしつつある。現代のチャ方言文章語およびカイ方言文章語は、言語面に関する著作も現れているが(19世紀の民族復興期までは、両マイクロ言語には文法書が存在した)、何よりもまず文学の面を発展させている。西ポレシエ語は、最近その言語の創設者がベラルーシからロシアへ移住したことに伴い、徐々に勢いを失っていった。

以上のように、20のうち13のマイクロ言語には全てさらなる発展の可能性がある。自立的マイクロ言語3言語および言語島のマイクロ言語5言語のうち、南ルシン語、ブルゲンラント・クロアチア語、バナト・ブルガリア語、そしてレジア語。周辺・言語島のマイクロ言語語5言語のうち、カルパート・ルシン語、ブニェヴァツ語。周辺のマイクロ語7言語のうち、シレジア語、チャ方言に基づく文章語、カイ方言に基づく文章語、そして西ポレシエ語である。

あまり発展していない残りの言語、すなわちモリーゼ・スラヴ語、エーゲ・マケドニア語、ポマク語、ヴェネツィア・スロヴェニア語、プレクムリエ・スロヴェニア語、ラフ語、東スロヴァキア語については、発展プロセスが非常に緩やかで一面的である。今後の運命は、それぞれの言語の文学・芸術面での発展を牽引するリーダーが現れるかどうかにかかっている。

8. スラヴ・マイクロ文章語の機能的側面

「スラヴ・マイクロ文章語の実際の使用領域」(拙著『スラヴ言語文化研究の基礎』第2巻に掲載)に基づく、マイクロ言語の使用域はかなり異なるということがわかる。機能面を最も満たしているのは、多くの使用域を徐々に失いつつある下ソルブ語以外の、自立的マイクロ諸言語である。

言語島のマイクロ言語のうち、機能面を満たしているのは南ルシン語だけである。その一方で、ブルゲンラント・クロアチア語が機能面で満たす程度はより低く、バナト・ブルガリア語はさらに低い位置にある。レジア語はあまり発達しておらず、モリーゼ・スラヴ語の発達も断続的である。

周辺・言語島のマイクロ言語のうち、カルパート・ルシン語だけが進展を遂げている。その一方で、ブニェヴァツ語は、目下のところ徐々に発展しているが、エーゲ・マケドニア語、ポマク語、ヴェネツィア・スロヴェニア語は文章語に求められる多様な機能ははたしていない。

最後に、周辺(・地域)マイクロ言語は、次の特徴を有している。シレジア語は滞り

なく発展している。文学・芸術的側面に偏っており、幾分一側面的であるのが、チャ方言に基づく文章語、カイ方に基づく言文章語、西ポレシエ語である。発展の程度が低いのがプレクムリエ・スロヴェニア語と東スロヴァキア語とラフ語である。

次に、最も機能面が発達しているマイクロ言語である南ルシン語を例として、この種の文章語形成にはどのような可能性があり、何を達成を目指しているのかを示そう。上述『スラヴ言語文化の基礎』の第2巻(p. 343)に掲載されている「スラヴ・マイクロ文章語の実際の使用領域」に従うと、南ルシン語は現在以下の領域で用いられているとされる。

1) 文学作品

- 詩：+
- 短編小説：+
- 長編小説：+

2) マスコミ

- 定期行物：+
- 新聞：+
- 雑誌：+
- 年報：+
- 上記以外の様々な出版物：+
- ラジオ：+
- テレビ：+

3) 教育

- 学校：+
- 初等学校：+
- 中等学校：+
- 高等学校：+
- 各学年：+
- 全ての基礎科目：+
- 基礎科目以外の一部の科目：+
- 大学：+

4) 行政機関（選択による）：+

5) 学術（人文社会科学）：+

6) 宗教生活：+

- 教会：+
- 聖書の翻訳：+

7) 民間施設：+

- 8) アマチュア劇団：＋
- 9) 地名標識：＋
- 10) 私的な文通：＋

下位区分を含むこの10の使用域は、マイクロ文章語の一つである南ルシン語が獲得した最大の機能面での使用域である。他のマイクロ言語のうち、これに近いのは自立語の上ソルブ語、それに続くのは言語島の言語のブルゲンラント・クロアチア語、さらに続くのは周辺・言語島の言語のカルパート・ルシン語などである。

リストにあるマイクロ言語の大部分（13言語）は、「大」スラヴ文章語と類似する傾向を有している。しかし、国境の問題、マイクロ言語の多くが民族的要因に依拠しているなど、「大」スラヴ文章語のような言語になるために必要な特徴が不十分なこともまた明白である。それにもかかわらず、本稿で論じたスラヴ・マイクロ言語文化は、目下のところ未発達マイクロ言語の諸例とともに、現代スラヴ民族・言語世界の重要な一部分であり、このことは、これらの諸言語を現代スラヴ言語文化の構成要素として見ることに正当性を与えているのである。

(菅井 健太 訳)